



👁️👁️ みどころ

「盲目のピアニスト」と聞けば、日本人なら誰もが、あの「佐村河内守事件」を思い出すはず。NHKスペシャル『魂の旋律 ～音を失った作曲家～』は、彼と『交響曲第1番《HIROSHIMA》』を絶賛したが・・・。

本作では盲目のピアニストのインチキ性が冒頭から示されるが、目の前で見た殺人事件とその後の処理について、「見えない目撃者」のフリをするのがミソ。しかし、この男ホントに見えてないの？それをチェックするにはどうすればいいの？

138分はインド映画では長尺ではないが、主人公の目がホントに見えなくなってからのドタバタ劇はスリラー？ホラー？それともブラックコメディ？いやいや、これこそ「インド式狂騒曲」だ。そんな、先の読めない怒濤の展開をタップリ楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■インドにも盲目のピアニストが登場！彼の狙いは？■□■

「盲目の黒人歌手」といえばレイチャールズだが、それと同じように(?)「盲目のピアニスト」として有名になったのが、佐村河内守。彼が作曲した『交響曲第1番《HIROSHIMA》』が絶賛されたうえ、NHKは2013年3月31日彼を特集したNHKスペシャル『魂の旋律 ～音を失った作曲家～』を放送した。ところが、2014年2月になると、週刊文春の暴露記事をきっかけに、ゴーストライター問題が発生すると共に、何と彼の目は見えていたことが暴露されたから、日本中が上を下への大騒ぎになった。そのうえ『交響曲第1番《HIROSHIMA》』の真の作曲者として、新垣隆氏が佐村河内守に

代わって超有名人になってしまった。ところが、何と「盲目のピアニスト」はインドにも！

盲目のピアニスト・アーカーシュ（アーユシュマーン・クラナー）は、あるレストランでピアノ演奏を披露していたが、その評判は上々。店主の娘ソフィ（ラーディカー・アープター）と恋仲になったうえ、上客のブラモード（アニル・ダワン）からは「妻シミー（タブー）の誕生日祝いのサプライズとして自宅でピアノ演奏をしてくれ」との依頼も。目が見えなくても、努力すれば報われるもの。本作の主人公アーカーシュを観ていると誰もがそんな前向きの気持ちになるはずだ。しかし・・・。

佐村河内守事件では、週刊文春の暴露記事が出るまで、天下のNHKをはじめ日本全国の人々は完全にだまされていた。しかし、本作ではアーカーシュの盲人ぶりはどこもなく怪しげ。そして、スクリーン上の登場人物には全員秘密だが、私たち観客には早々と実はアーカーシュの目は完全に見えていることが明かされる。しかして、なぜ彼は「盲目のピアニスト」のふりを？それは、後に明かされる彼の説明によれば、「芸術に集中するため」だそうだが、やっぱりそれは許されないのでは？

■□■「見える目撃者」による「見えない目撃者」の芝居は？■□■

韓国版、中国版（『シネマ 37』190頁）に続いて製作された日本版の『見えない目撃者』（19年）では、「見えない目撃者」の目撃証言と健常者の目撃証言のどちらが信用できるのかが、最大のポイントだった。そして、その答えを「アレ・・・？」と思わせる脚本が出色だった（『シネマ 45』191頁）。しかし、本作ではホントは見えているのに「盲目のピアニスト」を装っているため、「見えない目撃者」を装わなければならないアーカーシュの困惑ぶりに注目！

ブラモードがアーカーシュに依頼したのは、妻に告げないままハッピーバースディのサプライズとして妻にピアノ演奏を聴かせること。もちろん、その前にブラモードは誕生日祝いの花束を妻に手渡し、ハッピーバースディと告げ、キスを交わすことを予定していた。その直後にアーカーシュによる突然のピアノ演奏を聞かせれば、シミーは俺の愛の深さに驚きかつ喜ぶはず。ブラモードはそう確信していたわけだ。ところがアーカーシュがドアをノックし、サプライズ訪問であることを告げて部屋の中に入り、ピアノ演奏を始めると、何とその目の前に見えたものは・・・？

それが床の上に伸びた男の足だったから、アーカーシュはビックリ。もちろん、それはアーカーシュの内心だけの話で、表面に出すことはできないが、そこでアーカーシュがピアノの手を止めて「トイレに行きたい」と申し出たのは、事態の全貌を正確に掌握したいからだ。こんなお芝居はプロの俳優でも難しいが、このシークエンスでアーカーシュはプロの俳優以上のお芝居で盲目のピアニスト役を演じているから立派なモノだ。それにしても、トイレの中にはシミーの浮気相手の男が下着姿で立ったまま様子を見守っているから、その監視下で小用を足すのはさぞ大変だっただろう。また、ピアノの前に座ってピアノ演

奏をしている間も、彼はシミーとその浮気相手の男が共同して死体を片付け、床の血をふいている姿をずっと目撃しているのだから、その精神状態は大変だ。他方、この作業中、浮気男はひたすら沈黙を保つだけだが、やっていることとは全く違う会話でアーカーシュのお相手をしなければならないシミーのお芝居も大変だ。

そのため、この「見える目撃者」による「見えない目撃者」のお芝居はブラックユーモアそのものだが、恐ろしくもあり面白くもある、何とも言えないインド映画の味が・・・。

■□警察は市民の味方？それとも・・・？■□

『見えない目撃者』では、「見えない目撃者」であるヒロインが犯人の目撃情報を警察に届け出たにもかかわらず、警察が容易に「見えない目撃者」の目撃情報を信用してくれないことが大きな難関だった。そのうえ健常者による誤った目撃情報が提供されたから、警察がそれに幻惑されたのも仕方なかった。しかして、本作でも、死体もその処理も、そして2人の犯人の姿も見えないフリをして何とかその場を切り抜けたアーカーシュが、直ちにこの殺人事件を警察に通報しようとしたのは当然だ。

しかし、目の見えない自分が、いかにあ場の目撃情報を警察に通報するの？見えない目撃者の目撃情報を警察は信用してくれるの？逆に、もし自分の目がホントは見えることを自分からバラしてしまえば、これまでの自分の信用はガタ落ちになってしまうこと必至だ。しかして、警察署の中で警察署長・マノハール（マナフ・ヴィジ）と2人きりで対面したアーカーシュが、「見えない目撃者」としての「目撃情報」を通報できなかったのは仕方ない。しかし、同時に警察署長がそんなアーカーシュの様子をヘンに思ったのも当然だ。この警察署長は警察の中ではコワモテだが、家庭では妻の尻に敷かれているようだ。インド人の顔は日本人には馴染みが少ないので、誰が誰だかすぐにわからないが、アレレ、ひょっとしてこの警察署長は、あの家の中でパンツ姿で立っていたシミーの浮気相手の男？そう思っていると、案の定・・・。

本作では国際的な演技派女優として、普段は「いい女」役を演じているはずの、タブーのさまざまな悪女ぶりがメチャ面白いが、本来善良でリーダーシップを発揮すべき警察署長の悪ぶりもそれなりに面白い。あの時は、あのピアニストは「盲目のピアニスト」と信じていたのに、ホントは目が見えていた！そんなバカな！すると、あの時の状況はすべて、「見えない目撃者」ならぬ「見える目撃者」によって目撃されていた。すると、俺たちはどうすればいいの？それは、当然アーカーシュの抹殺！筋書きはそう決まっているが、本作はスリラーもの？それともコメディもの？さて、本作のその後の展開は・・・？

■□彼の目は見えるの？見えないの？そのチェックは？■□

アーカーシュの才能と人柄にはれ込んでいたレストラン店主の娘ソフィも、プラモードの前妻との娘で、アーカーシュからピアノを教えてもらっているダーニーも、アーカーシ

ユが「盲目のピアニスト」であることに何ら疑いを抱いていなかった。しかし、アーカーシュが「見えない目撃者」として目撃情報を警察に届け出ようとしたことを察知した警察署長は？また、彼と密に連絡を取っている不倫相手のシミーは？彼らは今でもアーカーシュが盲目のピアニストだと信じているの？

佐村河内事件で週刊文春がなぜ盲目のピアニストであることに疑いを持ったのか、また、それをどのようにチェックしたのか私は知らないが、そのチェックは難しいはず。しかし本作中盤では、突然アーカーシュの部屋を訪問したシミーがお土産のお菓子を食べさせた後、あの手この手でそのチェックをしようとするので、そのユーモラスな風景(?)に注目！自分の部屋の中では、目が見えなくてもお客さんにコーヒーをいれるくらいのことはできるはず。しかし、アーカーシュが入れたコーヒーに、シミーが目の前で毒を入れているのを見せられたうで、「さあどうぞ！」と言われると、それをアーカーシュが飲めないのは当然。そこでアーカーシュはやむを得ず、ちょっとしたはずみでそのコーヒーカップをひっくり返してしまうという下手な芝居を演じたから、それをシミーにとがめられたのは当然だ。その結果、すっかりアーカーシュの化けの皮がはがされてしまったのは仕方ない。

そこでアーカーシュは、「自分は何も見なかった」「黙って街を出ていく」と宣言することによってシミーとの和解を目指したが、そこで突然アーカーシュが苦しみ始めたから、その原因はシミーが先程食べさせたお菓子にあることは間違いない。しかし、その毒は一体ナニ？この毒でアーカーシュは死んでしまうの？しかし、シミーの説明によると、それはアーカーシュをホントに盲目にしてしまう薬らしい。なるほど、それならアーカーシュは元の状態に戻るだけだから仕方なし・・・？いやいや、そうはいかない。したがって、このシークエンス以降は、アーカーシュが必死に「俺を医者連れて行け！」と叫ぶストーリーが加わることになるが、そこで新たに登場してくる人物たちは？また、そこから更に次々と広がっていくドタバタ劇の展開は？

■ラストはまさに「インド式殺人狂騒曲」に！■

インド映画は長尺モノが多いが、本作は138分だからまずまず。また、近時のインド映画は歌って踊ってばかりではなくなっており、本作もそれだ。本作は、導入部ですぐに「盲目のピアニスト」たるアーカーシュが実は目が見えていることがバラされるから、意外にストーリーは単純！？アーカーシュが依頼されたプラモード宅でのピアノ演奏の中で、シミーの夫がシミーの不倫相手の手によって殺されているシークエンスをみていると、そう思ってしまう。しかし、本作中盤でアーカーシュの目が見えることがシミーにばれてしまう中、シミーに飲まれた毒薬によって、ホントにアーカーシュの目が見えなくなってしまうと、その後の展開は全く読めなくなってしまう。

そこで新たに登場してくるのが、①宝くじ売りのおばさん、②心優しいリキシャの運転

手ムルリ、そして③アーカーシュの目を治すために呼ばれながら、実は腎臓等の臓器移植で儲けようとしている怪しい医者スワミたちだ。また、シミーの警察への証言がウソだと証言しようとした、シミーの向かいに住んでいた住人ディサは、既にシミーの手によって階段から突き落とされて殺されてしまっていたが、アーカーシュと同じアパートの1階に住み、彼が本当に盲目なのかを疑っていた近所の少年は小遣い銭欲しさに一体ナニを？

このように、本作のラストからクライマックスにかけては、これら多種多様かつ怪しげな登場人物が入り乱れながら登場し、ドタバタ劇を続けていく。本作では、更にアーカーシュと暮している白黒の猫ラーニーもそれなりの役割を果たすので、この猫の演技（？）にも注目！

■□■本作の褒め言葉は？怒濤の展開をタップリと！■□■

本作のチラシやパンフには、「盲目を装うピアニストが殺人事件を“目撃”！？見えてるの？見えてないの？疑いが疑いを招くマörder・ミステリー開演♪」の文字が躍っている。また、チラシには「毎秒ごとに予測できないクレイジーさ！」「インドのコーエン兄弟だ！」「インド映画の中で唯一無二のスリラー！」そして「予測不能なブラックコメディに全インドが喝采！騒然！ブツ飛んだ！」等の「褒め言葉」が並んでいる。他方、チラシとパンフに写るアーカーシュとシミーの写真は、サングラスをかけたアーカーシュと目隠しをされたシミーの2人が椅子に縛り付けられたものだから、かなり痛ましい（？）もの。ところが、その横には「見えすぎちゃってスイマセン」とおふざげの台詞が書かれているから、これいかに・・・？

本作のパンフレットには村山章氏（映画ライター）の「観客を気持ちよく翻弄する新感覚のインド映画」と題するコラムがあり、そのラストには「ところが『盲目のメロディ』には、みごとに一貫した筋道がない。それは表層的な物語においても、感情の流れにおいてもだ。そして突拍子もなく行き当たりばったりなプロットそのものが、作品の魅力の源泉になっているのである。」と書かれ、さらに「主人公アーカーシュとソフィとの王道ロマンスも、悪人なのに憎めない脇役たちも、ふんだんなギャグもストーリー上のツイストもインド映画ならではの魅力だと思うのだが、決して物語の推進力にはなっていない。」と書かれている。この文章をしっかりと理解するためには、138分かけて本作を観る必要があるが、その138分間はきつと楽しいはずだ。たまに映画を観た後、「何とムダな時間を過ごしたのだろう」と後悔することもあるが、本作を観た138分間は絶対にそんなことはない、と断言しておこう。

原題の意味は分からないが、邦題の『盲目のメロディ インド式殺人狂騒曲』はまさにピッタリ。これ以上の邦題は思いつかないものだ。本作の「先の読めない怒濤の展開」をしっかりと楽しみたい。

2019（令和元）年11月28日記